《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

――和歌を主題とする組香（十五）――

矢野　環
福田智子

本稿は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介―和歌を主題とする組香（一）―」（『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月）、「同―同（二）―」（『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月）、「同―同（三）―」（『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月）、「同―同（四）―」（『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月）、「同―同（五）―」（『社会科学』第47巻第3号、二〇一七年十一月）、「同―同（六）―」（『社会科学』第47巻第4号、二〇一八年二月）、「同―同（七）―」（『社会科学』第48巻第1号、二〇一八年五月）、「同―同（八）―」（『社会科学』第48巻第2号、二〇一八年八月）、「同―同（九）―」（『社会科学』第48巻第3号、二〇一八年十一月）、「同―同（十）―」（『社会科学』第48巻第4号、二〇一九年二月）、「同―同（十一）―」（『社会科学』第49巻第1号、二〇一九年五月）、「同―同（十二）―」（『社会科学』第49巻第2号、二〇一九年八月）、「同―同（十三）―」（『社会科学』第49巻第3号、二〇一九年十一月）、「同―同（十四）―」（『社会科学』第49巻第4号、二〇二〇年二月）に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、数の巻から、花睡香を取り上げる。これにて、「竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介―和歌を主題とする組香―」と題する一連の資料紹介を終える。資料に関わる基本的な説明は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介」（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには〃」〃を付して丁数

を記す。

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第46巻第3号）を参照されたい。

一、（2）で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2（角川書店、二〇〇三年）に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《数巻―一〇》花睡香

【翻刻】

△（朱）花睡香

類題倭哥集

思ひ侘ぬせめて胡蝶の夢もかな心の花のたのしみにせん

此哥によりて綴侍たる也。坂内宗拾秘蔵せし組香の由云傳ふ。

一　試なし。

一　一炷開。」数五〇オ

一　十炷香の札を用。

一　一二三客の香、各三包充、都合十二包打交、其内一包除け、残十一包出香として、一炷充取て焚出す。初香と次香は二炷終て包紙を開き、三炷目よりは一炷毎に包紙を開くべし。

一　盤は十行（竪脱カ）横界十二間（一界の内に各穴有）。

立物」数五〇ウ

花臺（盤の幅同寸にして盤の向ふに置く）　牡丹（作物花臺の上に三本程美事に銛る。廻りに穴十を明る。）

蝶拾羽（始は柄に付置く。後に牡丹にとまるよふに作る。）

一　香の聞様、無試十炷香の通也。札打様も替事なし。

一　立物進は、初一炷を満座聞て札を打（極て一の札打也）。香元へ廻り来ると、蝶を不残一間目の穴に立て、銘々打たる札を取て、蝶の本にそれ〳〵に並べ置く也。二炷目より聞に随ひ、客地香の差別なく何人聞にても記録点の」数五一オ　数に合て其程進むべし。

一　独聞三度有たるは其蝶を花の下（モト）にて睡るといふ心にて牡丹の廻りに立る（独聞續と續ざるには拘わらず）。五度有は、蝶を牡丹の花にとまらせる也。皆中も同前なり。蝶の花の下に睡て後に三炷續て聞違たるは、蝶を最前の所に初のごとく立てる也。假令は三間目にて独聞三度ありて花の下に至らば、此度も三間目に前のことく戻して立替るべし。」数五一ウ

一　記録は、初炷目は始より一と不残認置き、二炷目より度毎に札を写べし。同香三包の内にて点掛様左のごとし。

初炷聞　一点　二炷聞　二点　三炷聞　三点
初炷聞　一点　二炷聞　二点　三炷違　点なし
初炷聞　一点　二炷違　点なし　三炷聞　二点
初炷違　点なし　二炷聞　一点　三炷聞　二点

始て出たる香に始ての札を打たるは定而一点懸る。其次より其札二枚結ざれは点なし。又其香と別札にても中下と二枚結たらば一点充かくるべし。」数五二オ

点例見分のため朱墨にて認る　ウ除香（朱）

〔表〕」数五二ウ

一番目に打たる惣一の札は、中下の内と二炷結たる時は点なし。二番目よりは始て出たる香に始ての札打たるは定て一点充かくる也。

甲行（朱）

○始て出たる一香に二の札、始て打たる故に一点朱点なり、二炷目三炷目の一香に二の札打ざる故に、二炷目より点なし。別札にても中下結たらば点かくるべし。

○始て出たる二の香に三の札、始て打たる故に一点朱点なり、二炷目三炷目の二の香に一の札打て中下結たる故に、三の札拘わらす一点充、都合三点也。」数五三オ

乙行（朱）

○始て出たる一香に一の札打たれども、始て打たる札にて非る故に点なし。二炷目三炷目の一香に三の札打て中下結たる故に、中一点下二点、都合三点かくる也。

○二の香は上下結たる故に三点也。

丙行（朱）

○三の香は上中結たる故に三点也。

○始て出たる一の香に二の札、始て打たる故に一点朱点なり、始て出たるウの香にウの札始て打たる故に一点朱点なり、各中下結ざる故に点なし。

丁行（朱）」数五三ウ

○始て出たる一の香、始て出たる二の香、始て出たるウの香、各始ての札打たる故に皆一点充朱点なり、各中下結さる故に点なし。

戊行（朱）

○三の香上下結たる故に、都合三点かくる。

○一の香上中下結たる故に、都合六点かくる。

○二の香中下結たる故に、都合三点かくる。

但し始に出たる二の香に始ての札打ざる故に点なし。

○ウの香二炷聞たる故に、都合三点かくる一炷は除香也。

一記録認様左に顕す。」数五四オ

花睡香之記　一除（朱）

〔表〕」数五四ウ

花睡香盤立物之圖

臺は唐木にて作る

（図中）盤の幅と同寸也（朱）

紅白の花を取交て美事に作てよし。

花の下に穴を十を明る

蝶　拾本

柄は長短あるがよし

（図中）此所ぬける（朱）

〔図〕」数五五オ

〔図〕」数五五ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　1　9

二　×　+

三　3－1＝×

ウ　2　1

本香には、地香「一」「二」「三」の香と「客」の香、各三包計十二包のうち一包を除き、残り十一包を用いる。試香はない。十炷香札を用い、無試十炷香の要領で香を聞き、札を打つ。初香と次香は二炷聞き終わってから包紙を開いて答えを披露するが、三炷目以降は、一炷開きで香を焚く。盤物である。

盤は、竪十行横界十四間で、枡目の内側にひとつずつ穴のあるものを用いる。立物には、盤の幅と同じ大きさの花台を用意し、盤の向こう側に置く。そして、その花台の上に、牡丹の作り物を三本程度、美しく飾り、その周りに穴を十開けておく。また、蝶を十羽用意し、始めは柄に付けておくが、後に牡丹にとまらせるために、柄から外れるように作っておく。

立物の進め方は、まず、初めの一炷について、無試十炷香のように連中みなが「一」の札を打ち、香元に香炉が戻ってくるのを待って、蝶をすべて一間目の穴に立てる。打った「一」の札は、それぞれの蝶の元に並べて置いておく。二炷目からは、客香・地香の区別なく、また、聞き当てた人数に関わらず、以下に説明する記録点の数に合わせて蝶を進める。

独り聞きが、連続するしないに関わらず三度あったときは、その蝶を牡丹の下に立てる。独り聞きが五度あったときや、十一炷すべてを聞き当てたときは、蝶を牡丹の花にとまらせる。蝶を牡丹の下に立てた後に、三炷続けて聞き違えたときは、蝶を元の盤上の位置に戻す。たとえば、蝶を三間目に立てた後に、独り聞きが三度あって花の下に蝶を立てた場合、その後の香を三炷連続で聞き違えると、蝶は元の三間目に戻して立てる

ことになる。

記録には、最初の一炷は始めからすべて「一」と書いておき、二炷目から一炷ごとに札の答えを写していく。点数は、同香三炷（以下、出香順により「上」「中」「下」と示す。）のうち、上の香にこれまで打っていない札を打つと一点となる。以降、同香を二炷聞き当てると二点、三炷すべてだと三点を得る。

以下、具体的に得点例をもとに説明する。なお、得点例には、上の香にこれまで打っていない札を打って一点を得た箇所には朱の合点が記されている。

甲行では、「一」の香の上に「二」の札を初めて打ったので、一点（朱点部分）を得る。だが、中・下の「一」の香に「二」の札を打っていないため、以降の点はない。ただし、「二」の札でなくても、別の札で中・下の同香を聞き当てていれば得点となる。たとえば、「二」の香の上に「三」の札を初めて打ったので、一点（朱点部分）であるが、「二」の香の中・下についてともに「一」の札を打ち、同香を聞き当てているので、「三」の札でなくても一点と二点の合計三点を得る。

乙行では、「一」の香の上に「一」の札を打ったけれども、すでに一炷目で「一」の札を打っており、初めて打った札ではないので点はない。だが、「一」の香の中・下について、ともに「三」の札を打ち、同香を聞き当てているので、一点と二点の合計三点を得る。なお、「二」の香は、上・下の同香二炷を聞き当てて、一点と二点の合計三点を得る。

丙行では、「三」の香の上・中を聞き当てているので、一点と二点の合計三点を得る。また、「一」の香の上に「二」の札を初めて打ったので一点（朱点部分）である。さらに、「ウ」の香の上に「ウ」の札を初めて打ったので一点（朱点部分）を得るが、中・下の同香を聞き違えているので、以下の点数はない。

丁行では、「一」「二」「ウ」の香の上に、それぞれ初めての札を打ったので、一点ずつ（朱点部分）計三点を得るが、それぞれ中・下の同香を聞き違えており、その他の点数はない。

戊行では、「三」の香の上・下を聞き当てているので、一点と二点の計三点、「一」の香の上・中・下、すべてを聞き当てて、一点・二点・三点の計六点、「二」の香の中・下を「三」の札で同香と聞き当てて、一点と二点の計三点を得る。ただし、三炷目に出た「二」の香の上には一炷目と同じ「一」の札を打っており、初めての札ではないので得点はない。「ウ」の香については、二炷聞き当てているので、一点と二点の計三点を得る。「ウ」香の残り一炷は除かれた香である。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に挙げられている歌は、『類題和歌集』巻第二十三恋部五、二二九三六番に載る（本文の引用は、研究叢書413『類題和歌集』〈日下幸男編、和泉書院、二〇一〇年十二月〉に拠る。）。

寄蝶恋

思ひ侘ぬせめて胡蝶の夢もかな心の花のたのしみにせん

作者名は明記しないが、集付に「信太杜」とある。この歌は、『宗良親王千首』七四一番に同じ題で載るが、この歌集は、「跋文の末尾にみえる親王の『かきおくもあだなる千えのことのはよ何としのだのもりの下風』によって、『信太杜千首』とも称される」（『新編国歌大観』宗良親王千首解題、小池一行・相馬万里子・八嶌正治）という。本伝書の集付は、この名称に拠ると見られる。

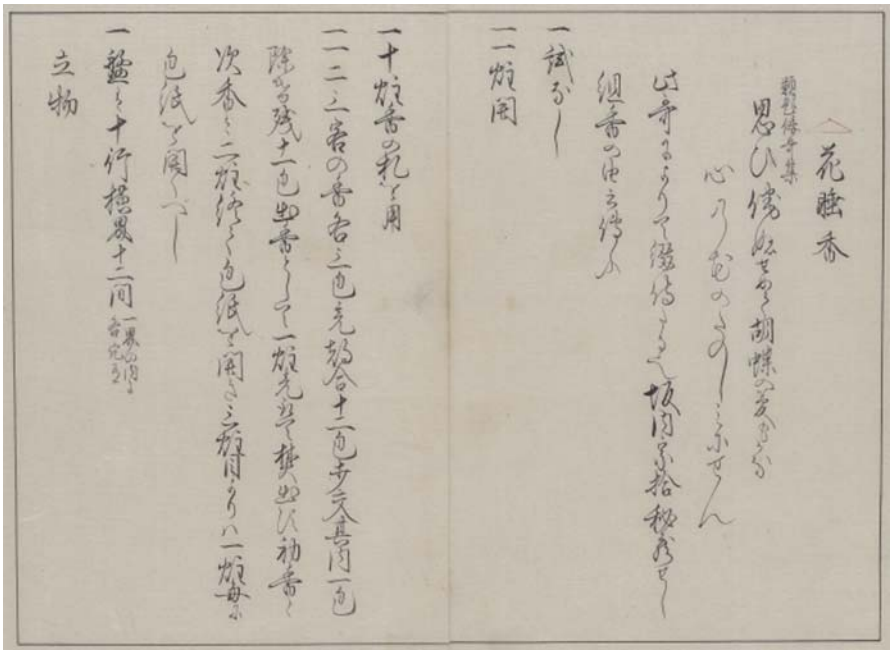
本伝書には、本組香が、「坂内宗拾」の「秘蔵」するところであるという伝承が記される。「坂内宗拾」は、武辺隆生（建部隆勝）に香を学んだ宗易（千利休）が、同門の山上宗二に、「香ノ事ハ坂内宗拾ニ問ベシ」（『山上宗二記』）と語ったという人物。「曽呂利新左衛門」と同一人物との見方もあるが、現時点では推測の域を出ない。

ちなみに、米川流を開いた米川常伯は、香道を、坂内宗拾の門人「六哲」（『香道濫觴伝書』）のひとり、京都相国寺の蘭秀等芳に学んでいる。

附記

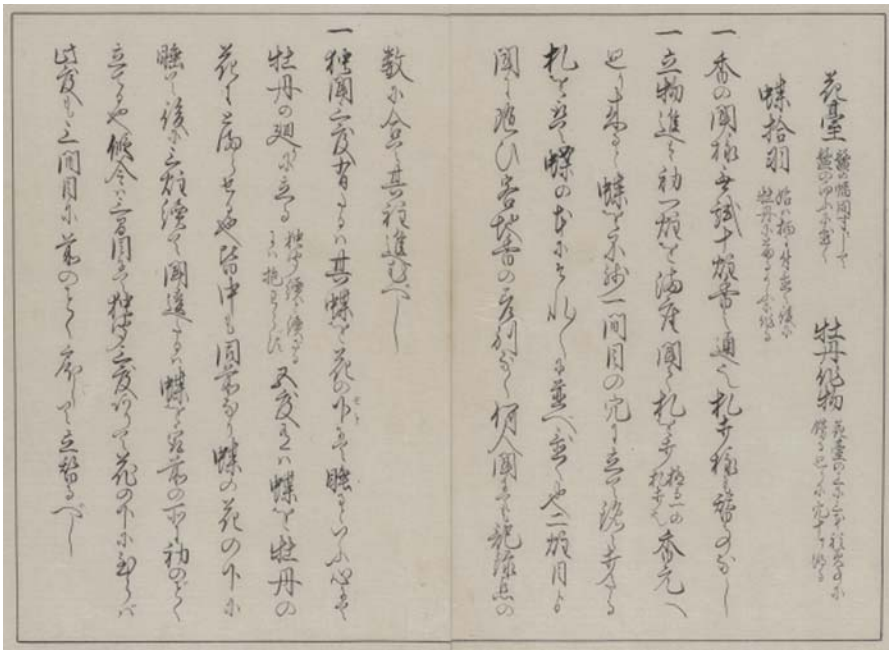
本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二一年度）、および「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一九年度）における研究の一部である。

【影印】綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



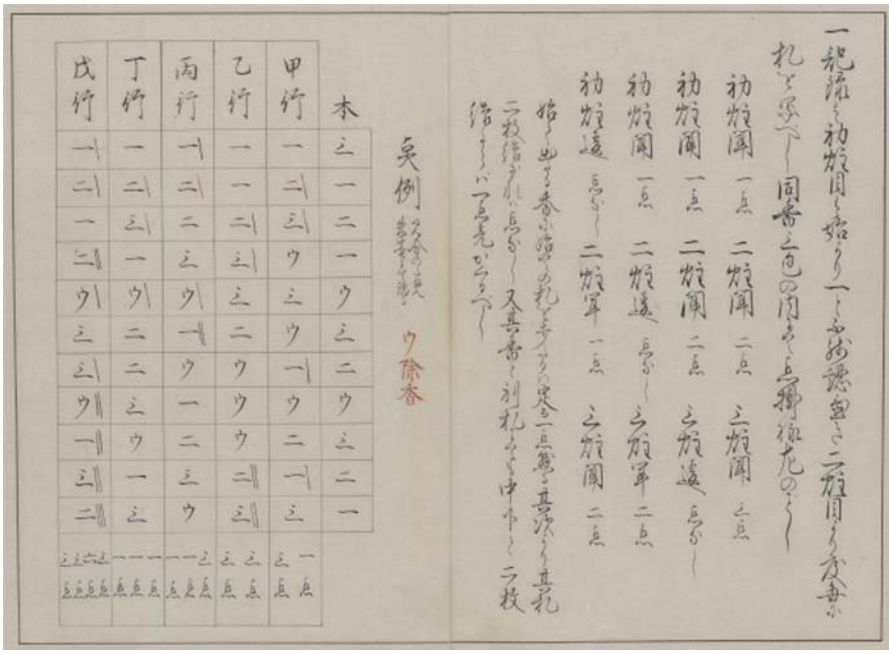
（数・五〇丁表）

（数・五〇丁裏）



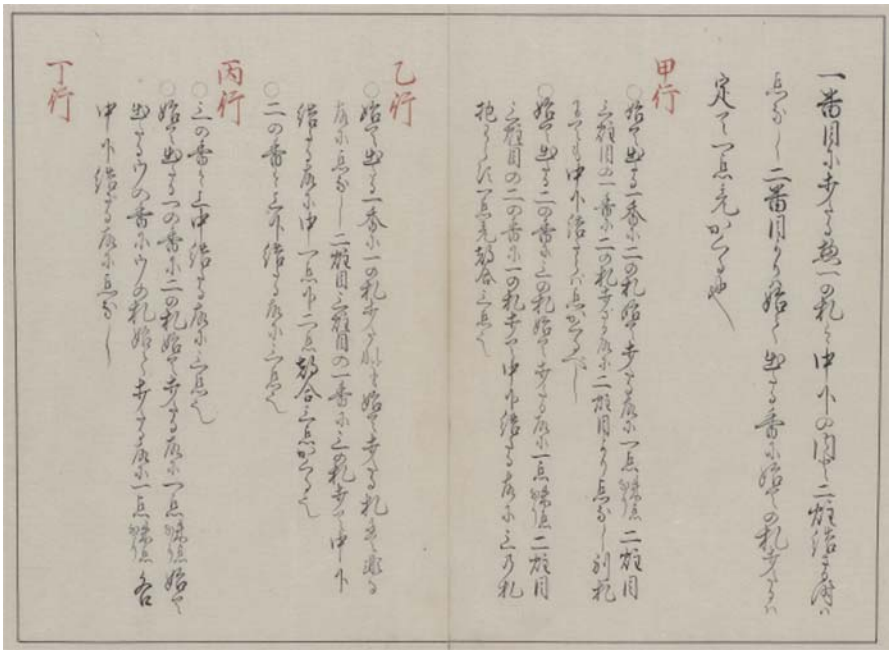
（数・五一丁表）

（数・五一丁裏）



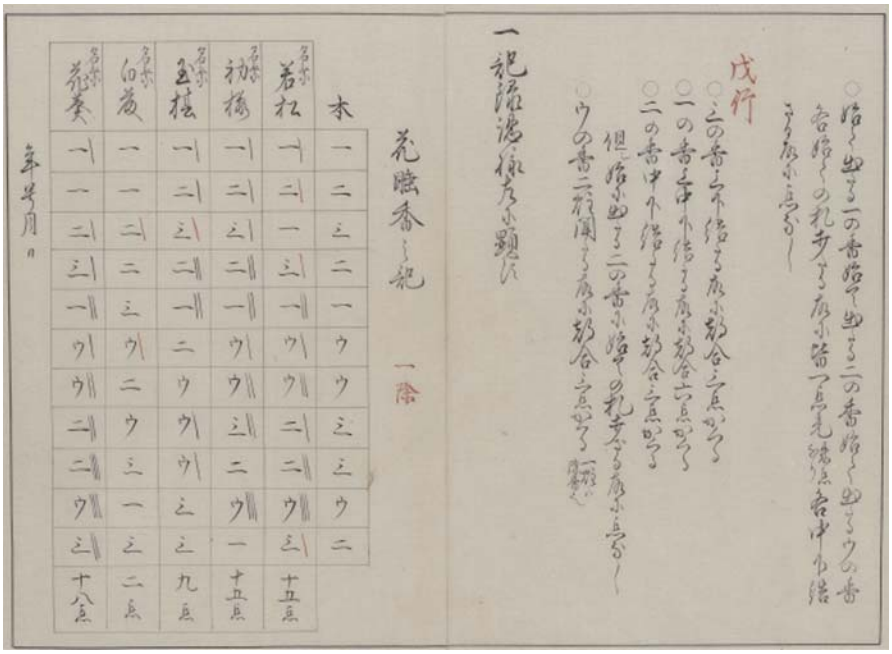
（数・五二丁表）

（数・五二丁裏）



（数・五三丁表）

（数・五三丁裏）



戊行

○二の番ニ不結る度ハ負合ニ点ハ
○一の番ニ中ハ結る度ハ負合二点ハ
○二の番中ハ結る度ハ負合三点ハ
但ハ結ハ出る二の番ハ結の札ニ成る度ハ点
○ウの番ニ敗闕る度ハ負合ニ点ハ

一記録法ハ後ニ顕ス

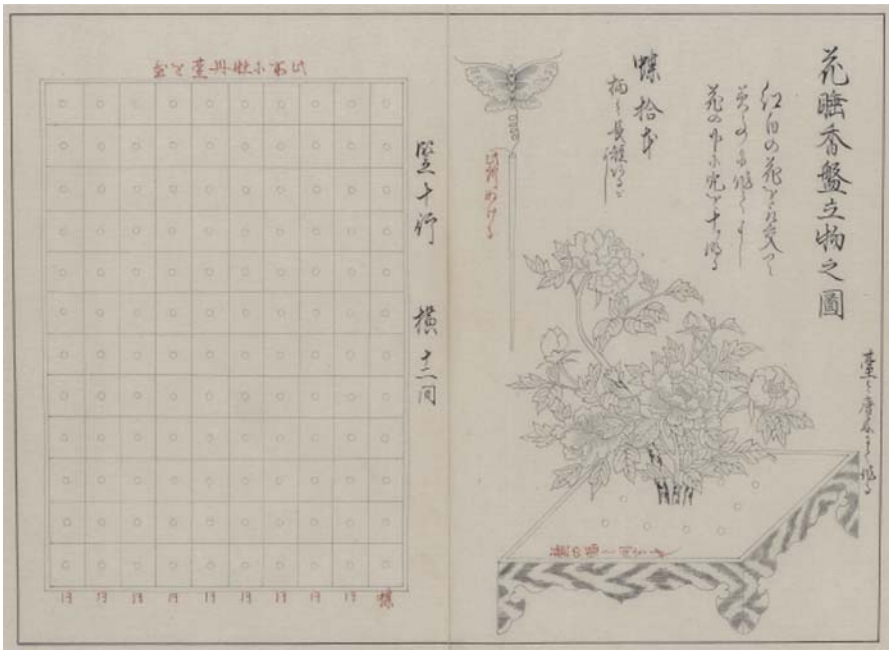
花聞香之記　一除

木	若松	初梅	玉椿	伯為	花菖
一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	一
三	三	三	三	二	二
二	一	二	二	三	三
一	一	一	一	一	一
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	二	ウ
三	三	三	二	ウ	二
三	二	二	二	三	二
ウ	ウ	ウ	ウ	一	ウ
三	三	三	一	三	三
十五点	十五点	九点	十五点	二点	十八点

年号月日

（数・五四丁裏）

（数・五四丁表）



花聞香盤立物之圖

紅白の花ニ成る気ニ
花の中ハ光ニ十ハ
蝶拾ハ
梅ハ長様ハ

盤十行　横十二間

（数・五五丁裏）

（数・五五丁表）